

学会の設立と発展を振り返る

小野寺 夏生

ONODERA, Natsuo

nt.onodera@y5.dion.ne.jp

2021年6月26日

情報メディア学会第20回研究大会

報告の概要

1. 学会設立まで
2. 設立総会、第1回研究発表会、第1回理事会
3. 会員数と決算額の推移
4. 主な事業の推移
 - (1) 研究大会と総会
 - (2) 研究発表会、研究会
 - (3) 『情報メディア研究』 *Journal of Information and Media Studies*
 - (4) 広報誌とホームページ
5. 規程類の整備
6. 初代事務局長としての思い出若干

【注記】

- ◆報告者が事務局長を務めた創設期の2000～2006年を中心に、学会の発展の歴史について知る限りで概観します。
- ◆以下に挙げる個人の方の所属は、すべて当時のものです。

1 学会設立まで

学会設立の発想と準備

◆発想者は当時の吉田政幸図書館情報大学学長

- 1999年、図書館情報大学にドクターコースの開設が決まる。
- 学位授与率向上のために若い人たちの研究成果の発表の場が必要

⇒ 図書館情報学の関連領域を広くカバーする学会を設立したい！

◆設立に向けての準備

- 図情大の数人の教員により構想が練られ、図情大以外にも広く学会設立に向けての活動を展開
- 100名以上の方に設立発起人になっていただき、発起人による趣意書を広い範囲に送って入会と設立総会への参加を勧誘
- 「情報メディア学会設立準備会」により設立総会のための準備（役員就任の折衝、学会規約案の作成、初年度の事業計画案と予算案の作成等）

「情報メディア学会」創設のお知らせ

(設立発起人による趣意書から抜粋)

(前略)

この「情報メディア学会」は、デジタルの行「情」ムでをす。貢一し
 デジタルの行「情」ムでをす。貢一し
 ギャラリーを会、ズ会究まにべに
 からデジタル動学究ニ学研り会タと
 アメレ活ア研力のアあ社一こ
 イ報そ究イのメ存イで、デる
 デ情、研デ盤知既デのく、め
 メチてなメ基認のメもなツし
 情報マ「際情会性ま情すでテ知
 グらに学「社感れなとけん
 ナロアにす。るのこのうだコ世
 アアイにす。わ間、機よ文(、
 アイデもでか人ど有し論品し、
 デメとのかるなで立究作価
 は、メ報ともにお究的確研報評
 報情るるアか研合てた情に
 情なめすイかの総しれる当
 文字様進とデにてたと優あ正
 文多をうメ法いつ域、値をす。
 種究よ報手つか領は価)ま
 ア多研け情宮にな問でる等り
 ィるら設、経料れ学会れムお
 デすかにての材らの学わラて
 メ存場たしア体げ有の思グえ
 報共立新とイ媒あ固ことロ考
 情、的を心デてりな、るプと
 ルで、門場中メしとたたす、たい
 タま専うを報そは新ま献ス、たい

(後略)

2 設立総会、第1回研究発表会、第1回理事会

設立総会（2000年6月10日、於図書館情報大学）

◆出席者 49名（この日までの入会届提出者は120名）

◆議事

- (1) 開会の辞
- (2) 経過報告
- (3) 情報メディア学会規約（審議） 一部修正の上承認
- (4) 平成12年度役員構成（審議） 承認
- (5) 会長挨拶 坂元昂会長（欠席のため代読）
- (6) 平成12年度事業計画及び予算案（審議） 承認
- (7) 開催校挨拶 吉田政幸図情大学長
- (8) 閉会の辞 田畑孝一副会長

※議長は上記(4)まで石塚英弘世話人、(5)以降は高山正也副会長

2 設立総会、第1回研究発表会、第1回理事会

第1期の役員（任期：2000年6月～2003年6月）

【会長】

坂元 昂（メディア教育開発センター）

【副会長】

田畑 孝一（図書館情報大学）

高山 正也（慶應義塾大学）

【理事】

青山 紘一（特許庁）

石塚 英弘（図書館情報大学）：論文誌編集
担当

猪瀬 博（国立情報学研究所）

上田 修一（慶應義塾大学）

小野寺夏生（図書館情報大学）：事務局長

白川 英俊（NTTアクセスサービスシステム研究所）

杉本 重雄（図書館情報大学）

田中 久文（日本大学）

名和小太郎（関西大学）

根岸 正光（国立情報学研究所）

野添 篤毅（愛知淑徳大学）

波多野和彦（メディア教育開発セン
ター）：研究発表会担当

藤野 幸雄（愛知学院大学）

細野 公男（慶應義塾大学）

馬 遠良（上海図書館）

山本 順一（図書館情報大学）：広報担当

吉田 政幸（図書館情報大学）

【監事】

金沢みどり（東洋英和女学院大学）

森田 歌子（科学技術振興事業団）

第1回研究発表会（設立総会と同日に開催）

◆出席者 約70名

◆基調講演

「情報基盤：3つの動向」 名和小太郎氏（関西大学）

◆一般発表

1. 学術情報メディアの電子化に関する学協会の意識 平井歩実、二村健（明星大学）
2. 学校図書館の情報教育的活用：インターネットサーバの構築を通して 平井尊士（兵庫大学）
3. 多面体C A Iの開発 丸山有紀子、細矢治夫（お茶の水女子大）
4. わが国の学術論文の引用分析と引用索引データベースの形成 西沢正己、根岸正光（国立情報学研究所）
5. 司書教諭情報化研修教材の開発 波多野和彦（メディア教育開発センター）

	促進的 ↓	中立的 ↓	抑制的 ↓
1964	INTELSAT稼働		
1970	SITAコンピュータ化		
1972	MARK-III稼働(GE)		
1973	SWIFT稼働		
			個人データ TDF 規制(スイーデン)
1974		「越境データ流通」セミナー(OECD)	
1976			D-1 勧告(ITU)
1978	○	「マニラ宣言」(UNESCO)	
			情報産業TDF 規制(フランス)
1979			「主権に対する電気通信の意味」(カタ)
			「コンピュータ社会の脆弱性」(スイーデン)
			「社会の情報化」(フランス)
1980		「多くの声・一つの世界」(UNESCO)	
			銀行データベース国内保持(カタ)
			「プライバシーガイドライン」(OECD)
			ユーロネット稼働(EC)
1981	越境データ流通公聴会(US)		
1983	「情報流通—国際ビジネスからの展望」(ICC)		
		国際コミュニケーション年(UN)	
1985			「個人データ保護条約」(CE)

1985		「7-9 宣言」(OECD)
1986	GNS 設置(GATT)	
1987	国際VAN 合意(US~日)	
1988		7-9-7 禁輸(US)
		国際電気通信規則(WATTC)
1989		「カッコウの卵」(US ~西ドイツ)
1991	D-1 勧告改正(ITU)	
1992		組織再編成(ITU)
1995	GSM 標準化合意(EU~US)	
		「個人7-9 保護指令」(EU)
<hr/>		
1995	インターネット 民営化(US)	
	「世界情報基盤協力計画」(US)	
	ONP 指令(EU)	
		情報ネット(G-7)
1996	通信法改正(US)	
	新著作権条約(WIPO)	
1997	基本電気通信合意(WTO)	
	「知-財と電子商取引の枠組み」(US)	
	「gTLD-MoU」(IAHC)	
		「略号政策制作5ヶ年」(OECD)
1998	「DNS の管理」(US)	
		電子商取引に関する国際会議(OECD)

表1 越境データ流通問題の経過

		～85年代	85～95年	95年～	
価値観レベル	促進的	————	市場原理 学術情報共有	市場原理 セルフガバナンス	
	中立的	世界情報新秩序	————	世界情報基盤	
	抑制的	個人データ保護 情報主権	国家安全保障	文化的多様性個人データ保護	
応用レベル	促進的	国際コンピュータサービス データハイブ	サービス貿易 ホータレスエコノミー	電子商取引 メガコンペティション	
	中立的	————	————	————	
	抑制的	情報産業保護	COCOM	越境犯罪 DNS—商標紛争	
基盤レベル	技術的	促進的	デジユレ標準	デファクト標準	
		中立的	————	デジユレ標準	
		抑制的	————	————	
	制度的	促進的	————	知的所有権保護	次世代DNS構想 インターネット民営化
		中立的	ITU体制	————	————
		抑制的	————	国際VAN制度	————

表2 越境データ流通問題のキーワード

	国際機関主導型	市場主導型	ユーザー主導型
標準化組織	国連の専門機関	任意団体	任意団体
メンバー	国の代表	企業（群）	ユーザー
メンバーシップ	開放的	閉鎖的 ，	開放的
対象	ハードウェア	ハードウェア／ソフトウェア	ソフトウェア
手順	透明	不透明	透明
合意／導入	合意先行	並行	導入先行
リード・タイム	長い	短い	なし
標準保有	標準化組織	企業（群）	公有
知的所有権	公開／有償	秘匿／有償	公開／放棄
決定法	投票	市場競争	反対なし

表3 標準化プロセス

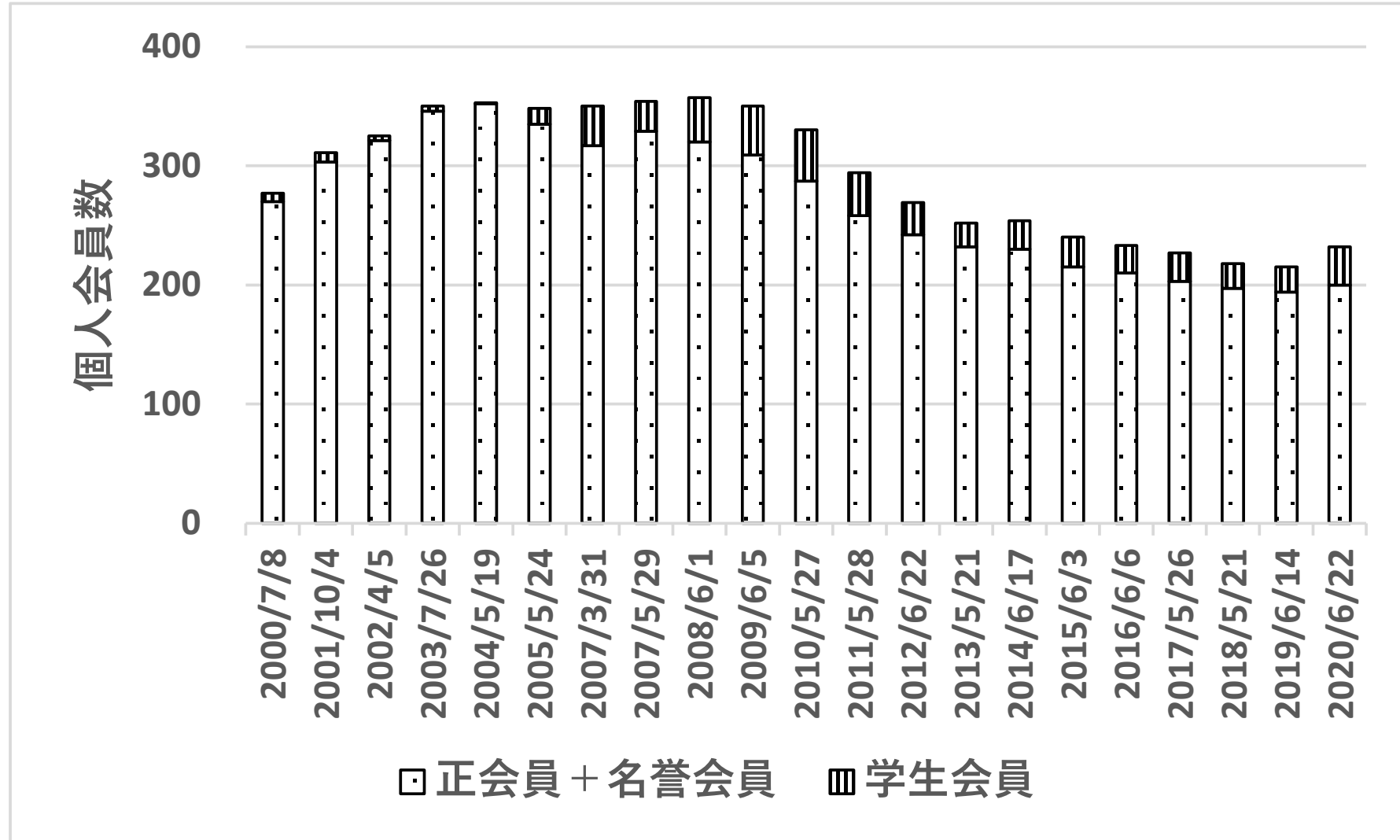
第1回理事会（2000年7月8日）

当面の活動の方向づけがなされた。

- (1) 理事会運営の方法及び理事会で審議する事項の原則について
理事会運営内規の承認（理事会で審議/報告すべき事項を定める）
- (2) 入会の承認について 277名の入会を承認
- (3) 理事の任務分担について
学会誌編集、研究発表会、広報、会員、会計の担当を決定
- (4) 学会運営の細則について
学会運営細則の承認（賃金、旅費・交通費、会議費、謝金の基準を定める）
- (5) 学会ホームページの開設について
NIIのWWW資源提供サービスの利用を承認
- (6) 本年度の予算執行について

3 会員数と決算額の推移

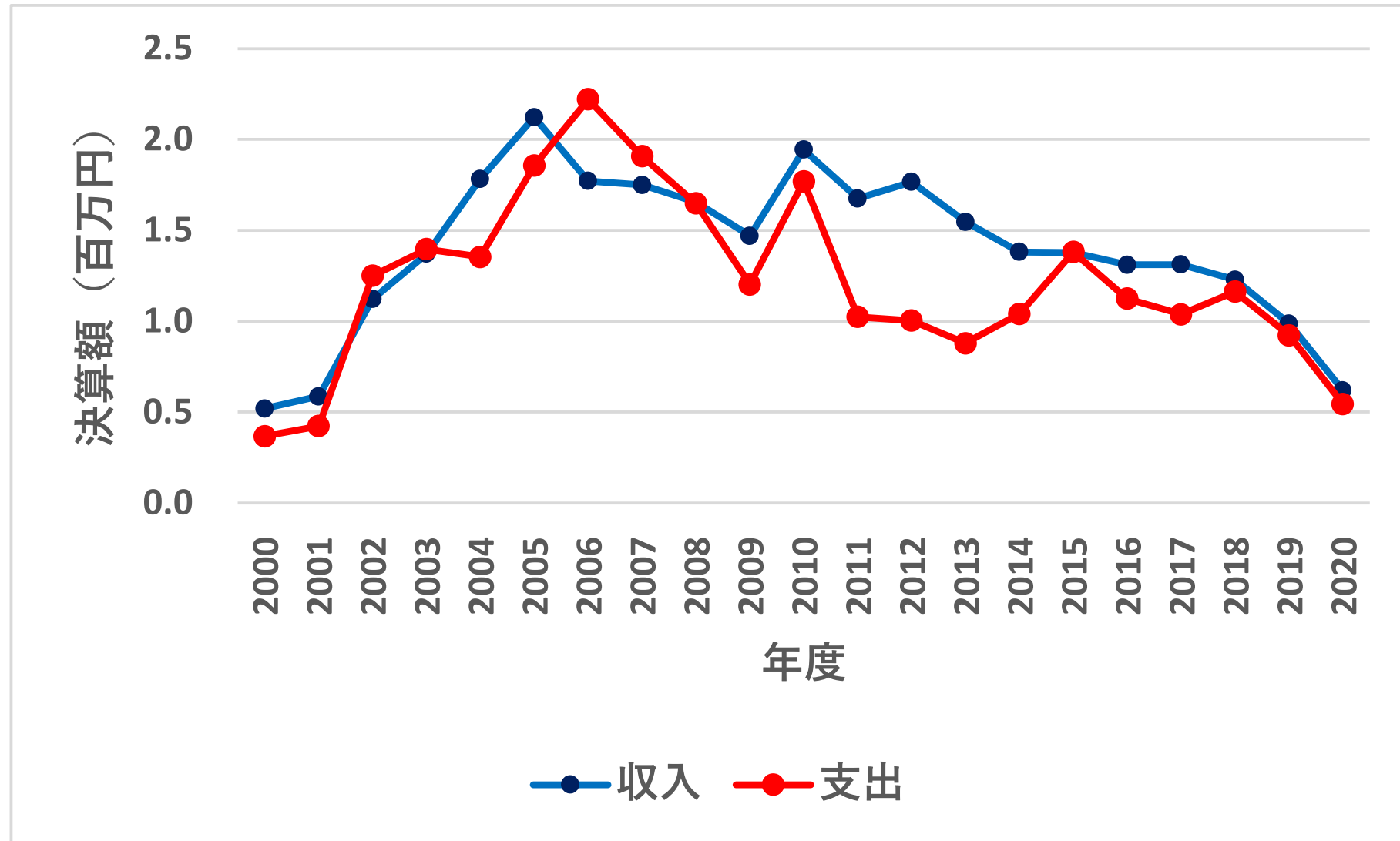
会員数の推移(1)



会員数の推移(2)

- ◆第1回理事会(2000.7.8)で、**277名**(正会員270名、学生会員7名)を承認。
- ◆2002年10月18日**356名**(正会員351名、学生会員5名)で最高に達する。
- ◆2003/04/25 初の**賛助会員2機関**の入会を承認
- ◆2004/05/19 **賛助会員6機関**となり最高(渡部理事の尽力大)
- ◆2010年度以降は減少が続いていたが、2020年にはやや持ち直した。

年度決算額の推移(1)



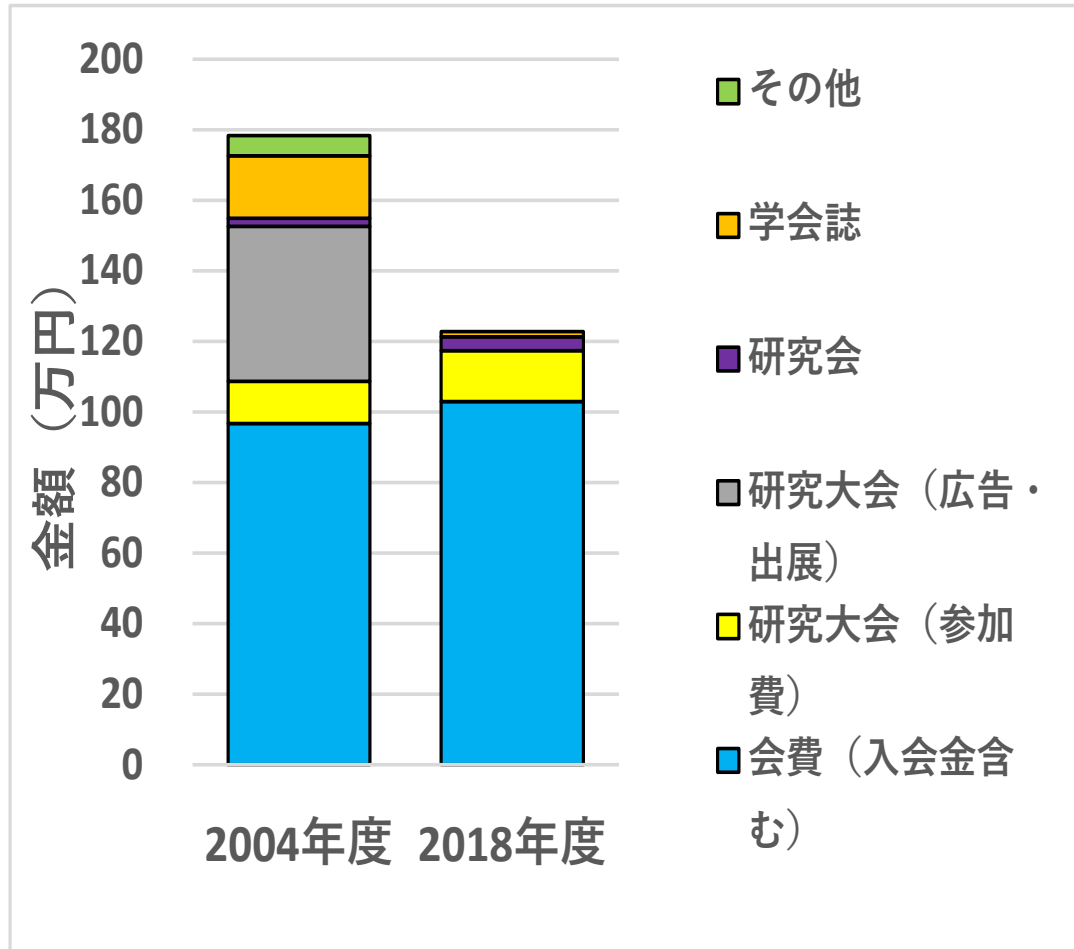
年度決算額の推移(2)

- ◆2002年度に、収入、支出とも急上昇
この年度に最初の研究大会が開かれたことによる。
- ◆その後2005年度までは順調に収入が伸びる
会費収入及び研究大会での広告・出展の収入の増加が主な理由
- ◆2009年度と2010年度の動きは、収入、支出ともやや不規則
主に、2010年度に学会誌の冊子版を2回発行したことによる支出増と、研究大会の収入、支出両方の変化による。
- ◆2011年度以降支出が減少
事務局経費の削減によるところが大きい。

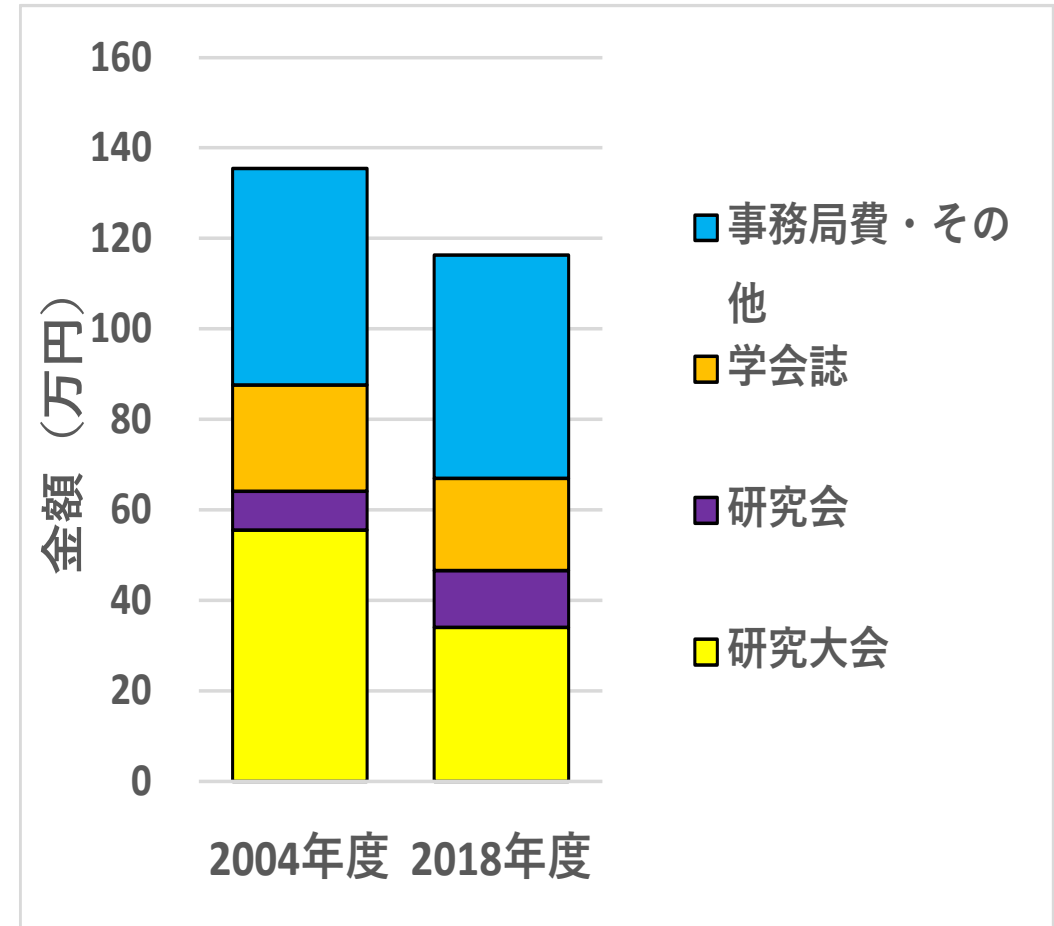
3 会員数、決算額推移

2004年度と2018年度の決算細目比較(1)

【収入】



【支出】



2004年度と2018年度の決算細目比較(2)

◆収入について

- **会費収入**：2018年度の個人会員数は2004年度の6割程度であるが（賛助会員は半数）、会費収入はむしろ上回っている
会費を値上げしたことと事務局の努力による
- **研究大会での広告・出展収入**：2018年度にはほとんどない
- **学会誌収入**：2018年度にはほとんどない
2004年度には会員にも有料で販売し、それ以外にも、研究大会や研究発表会の販売がある程度あった

◆支出について

- 2004年度に比べての2018年の減少は、ほぼ研究大会費の減と見合っている

4 主な事業の推移

4.1 研究大会、総会

4.2 研究発表会/研究会

4.3 『情報メディア研究』

4.4 広報誌とホームページ

研究大会と総会の推移

◆研究大会

- 坂元会長の強い要請により、設立2年後の2002年5月11日、第1回研究大会の開催に漕ぎ着けた
- 以降毎年6月頃開催
- 今回をもって第20回を迎えた

◆総会

- 第1回（設立総会）を2000年6月10日に開催
- 第2回は、第3回研究発表会に合わせて2001年10月13日に開催
- 第3回以降は、毎年の研究大会に合わせて通常総会を開催
- このほか、2004年11月に会費改訂のため臨時総会を開催
- 本日の通常総会をもって第23回となる

第1回研究大会

◆2002年5月11日、日本科学未来館にて開催

- 基調テーマ：e-Learningの現状と将来、その情報メディア研究との関わり
- 基調講演講師：清水康敬氏（国立教育政策研究所所長）
- 参加者数 132、出展機関数 7、ポスター発表数 8

◆第1回の大会企画委員会メンバー（敬称略）

- 委員長 山本順一（図書館情報大学）
- 委員 石川敬史（工学院大学）
- 白木澤佳子（科学技術振興事業団）
- 波多野和彦（メディア教育開発センター）
- 福島勲（ディック・アルファ）
- 三輪眞木子（メディア教育開発センター）
- 渡部満彦（大妻女子大学短期大学部）

4 主な事業

第1回～第5回研究大会

回	開催日	会場	基調テーマ	基調講演講師	参加者数	出展機関数	ポスター発表数
1	2002.5.11	日本科学未来館	e-Learningの現状と将来、その情報メディア研究との関わり	清水康敬氏 (国立教育政策研究所)	132	7	8
2	2003.6.21	JST	情報化社会の推進とセキュリティ管理	岡村久道氏 (弁護士)	117	5	10
3	2004.6.26	東大山上会館	情報メディア研究の潮流と今後の展開	西垣通氏 (東大)	140	7	10
4	2005.6.25	大妻女子大	情報社会のメソドロジー	横江公美氏 (Pacific21)	117	5	11
5	2006.6.10-11	鶴見大	デジタルコンテンツの最新動向	神門典子氏 (NII)	111	6	8

4 主な事業

◆第1回～第5回研究大会の企画委員会委員長

- 第1～2回 山本順一氏
- 第3～4回 渡部満彦氏
- 第5回 長塚隆氏

◆研究発表会/研究会の推移

- 第1回は設立総会と同日に開催（2000年6月）
- 2000年度は翌3月にもう1回開催
- 2001年度以降は毎年度1回、10～11月に開催
- 第2～7回は研究発表会と研究会の名称を併用、第8回以降研究会に統一
- 今年度をもって第23回を迎える（11月予定）

4 主な事業

第1回～第7回研究発表会/研究会

回	開催日	会場	基調（特別）講演講師	発表数	参加者数
1	2000.6.10	図書館情報大学	名和小太郎氏（関西大学）	5	約70
2	2001.3.24	学術総合センター	青山紘一氏（特許庁）	9	62
3	2001.10.13	図書館情報大学	夏井高人氏（明治大学）	7	44
4	2002.10.19	学術総合センター	四元正弘氏（電通総研）	7	51
5	2003.11.22	印刷博物館	加茂竜一氏（凸版印刷）	7	43
6	2004.11.20	駿河台大学	波多野宏之氏（駿河台大学）	8	40
7	2005.11.26	東京ドイツ文化センター	都築正巳氏（筑波大学） ロナルド・シュミット氏 (Hochschulbibliothekszentrum)	6	55

4 主な事業

情報メディア学会誌 出版の基本方針（要旨1）

ニューズレターNo. 2（2001年7月発行）から要約

◆出版形態

- Web版と紙媒体版を出版：同じレイアウト、同じ通し頁、同一のISSN
- Web版：会員、非会員とも無料で閲覧可 サイトはJ-STAGEを想定
- 紙媒体版：図書館、会員の希望者に頒布 価格は別途定める

◆掲載するものの種類とその特徴

- 種類：原著論文、資料的価値のある論文、レター、作品（制作物、デジタルアート）、解説、その他の記事など
- 原著論文：研究論文、事例研究論文、調査論文、サーベイ・ペーパー等、幅広いものとする 査読者2名
- レター：査読無し、採否は編集委員会が決める
- 資料的価値のある論文、解説：査読者1名
- 作品：内容、査読等についてはさらに検討

4 主な事業

情報メディア学会誌 出版の基本方針（要旨2）

◆ 論文本体の言語

- 日本語、英語の何れでもよい

◆ その他（投稿規定暫定版による）

- **査読システム**：原著論文の投稿者にはメタレビュアーと査読者は匿名 (single-blind制)
- **著作権**：本学会に帰属するが、著者自身および所属機関による公衆送信を認める。
- **投稿資格**：著者のうち少なくとも一人は本学会の会員であること
- **ページチャージ**：投稿原稿が採録された場合、PDFの1ページ当たり500円

4 主な事業

学会誌『情報メディア研究』の推移

- ◆ニューズレターNo. 2（2001年7月発行）に、**学会誌出版の基本方針と投稿規定（暫定版）**を掲載
- ◆しかし、実際の編集・出版は遅れ、**2003年5月に第1巻第1号**を発行（**投稿論文はなく講演記録だけを掲載、冊子体のみ**）
- ◆**2003年7月25日に最初の投稿論文**（佐藤義則，永田治樹．大学図書館の「サービス品質」評価を構成する局面）が受理され、**間もなく電子版が公開**される
- ◆**2004年3月に冊子体の第2巻第1号**を発行。投稿論文5編、著書・作品紹介2編の他、第2回研究大会の基調講演とシンポジウムの記録、学会活動報告を掲載
- ◆以降、投稿論文は**冊子体発行以前からWeb公開**し、冊子体にはこの他講演記録、学会活動報告等を含むという方式が定着 冊子体は毎年1回発行

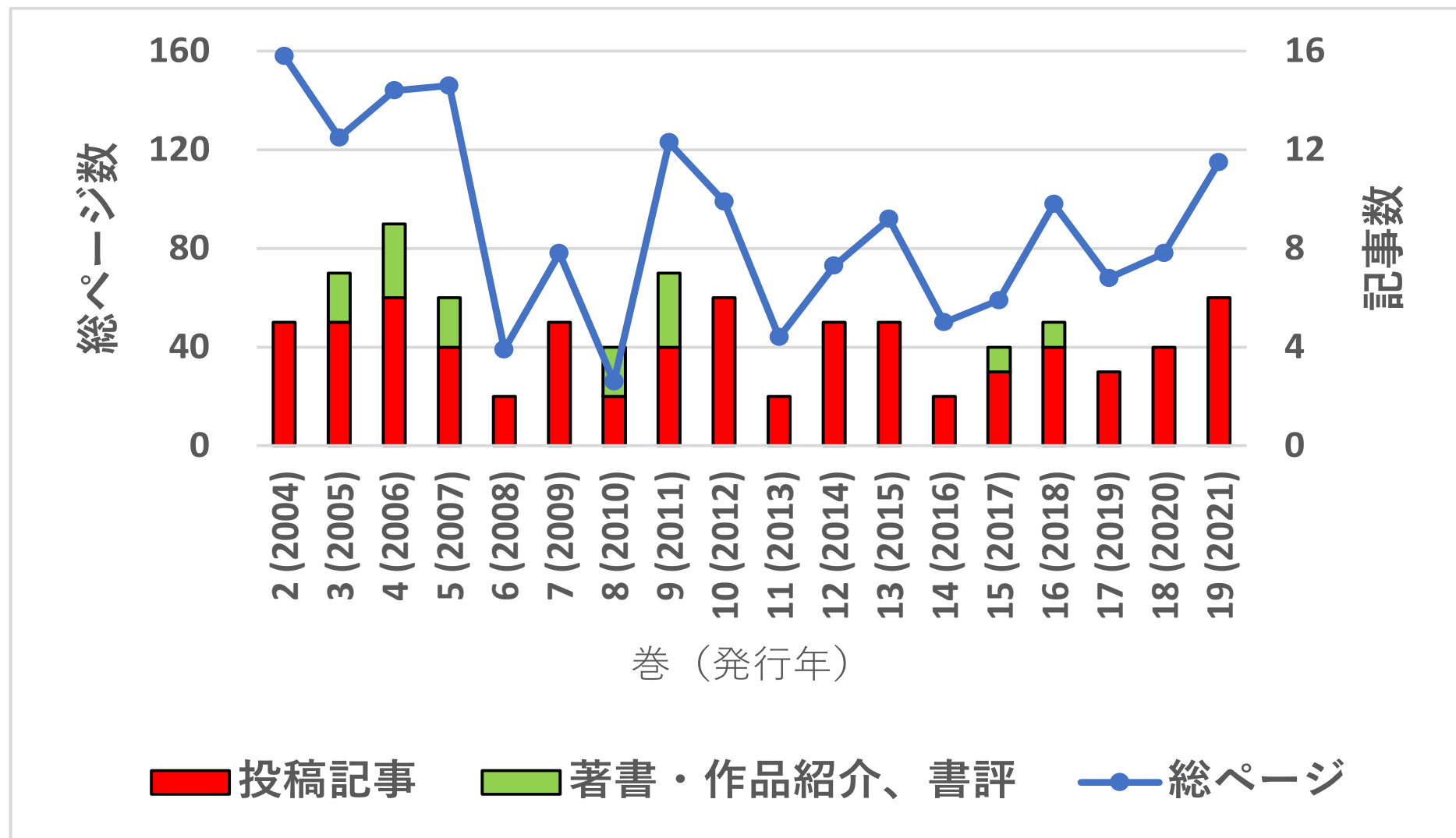
4 主な事業

情報メディア学会論文賞

- ◆情報メディア学会論文賞規程の制定（2005年12月5日理事会）
- ◆第1回の論文賞を決定（2006年5月30日理事会）
佐藤義則，永田治樹．大学図書館の「サービス品質」評価を構成する局面
6月10日の総会において報告
- ◆毎年度の学会誌論文から選ばれるが、それが10件に達しないときは次年度と併せて選考
- ◆これにより、以降、2年に一度の受賞が続いている

4 主な事業

『情報メディア研究』冊子体のページ数と記事数



4 主な事業

情報メディア学会ニューズレター

◆2000年11月、第1号発行

- 会長あいさつ：情報メディア学会の発展を願って（坂元昂氏）
- 副会長のことば：情報メディア学会の存在意義（高山正也氏）
「情報メディア学」とは何か（田畑孝一氏）

➤ 事務局から

➤ 第2回研究会開催のご案内及び発表申込書

ニューズレターの送付方法に関するアンケートの結果では、電子メールのみの配布で可が67名、電子メールと郵送の両方を希望が26名、郵送を希望が6名、その他1名であるが、ずっと郵送が採られている

◆第2号から会員による巻頭言、事務局からの報告、研究発表会や研究会のお知らせと発表募集、論文誌への投稿のお勧め等を掲載し、年2回発行の方式が定着、現在に至る（2021年2月に第42号）

4 主な事業

学会ホームページ

- ◆ 設立後間もなく（2000年7～9月の間）開設
NIIのWWW資源提供サービス (Academic Society Home Village)
を利用
- ◆ 2005年前半にドメインjsims.jpを取得
2007年2月に学会ホームページを開設

5 規程類の整備

学会規約の制定と改訂

- ◆ 設立総会で最初の規約を制定（2000年6月10日）
- ◆ その後4回の改訂
 - 2003年 6月21日
 - 2004年11月20日
 - 2009年 6月27日
 - 2013年 6月29日

5 規程類の整備

当初規約と現規約の比較(1)

【当初規約になく、後に追加された事項（その1）】

1. 行う事業に、「情報メディアに関する調査・研究」と「情報メディアに関する普及・啓蒙・教育」を追加
2. 賛助会員になろうとする団体、組織はその窓口になる者の名を併せて申し込む
3. 入会金1,000円の徴収
4. 特別の理由がある場合、理事会は入会金および会費の減免措置を定めることができる
5. 理事の役割として、会務の方針の決定の他、各々の職務を執行する旨を追加

5 規程類の整備

当初規約と現規約の比較(2)

【当初規約になく、後に追加された事項（その2）】

6. 理事会の任務、運営に関して以下を追加
 - 緊急を要する場合、電磁的通信手段によって理事会を開催することができる。この場合の議決は、理事現在数の3分の2以上が賛否を表示し、その過半数による。
 - 毎事業年度の事業報告と決算報告を作成し、翌年度の通常総会で承認を得る
 - 毎事業年度の事業計画と予算を作成し、通常総会において報告
7. 会員に『情報メディア研究』を無償配布
8. 理事会の議決により委員会を設置できる

5 規程類の整備

当初規約と現規約の比較(3)

【当初規約から変更または詳細化された事項】

	事項	当初	現在
1	学生会員	学部学生等	学生（大学院生を含む）等であってそれ以外の業務に従事しない者
2	年会費の額	正会員2,000円、学生会員1,000円、賛助会員1口10,000円	正会員5,000円、学生会員2,500円、賛助会員1口15,000円
3	総会に関する規定	開催：年1回の通常総会、理事会の同意または会員の1/5以上の要求による臨時総会 議決：出席会員の過半数 規約改正：総会での2/3以上の賛成による	会員の要求による臨時総会：会員の1/10以上となる 左記の他、構成と議決権、議決事項、招集、定足数と委任状、議長選出等の条項が加わる
4	理事の定数	20名	5名以上20名以内
5	会長、副会長、事務局長	理事会において互選の後総会の承認が必要	理事会の互選のみ

5 規程類の整備

当初規約と現規約の比較(4)

【当初規約にあったが後に削除された事項】

1. 理事会は常任理事会（理事10名から成る）に日常的会務の運営を委任できるとしていたが、実際には常任理事会が設置されたことはなく、この規定は削除された。
2. 会長の諮問に応じて助言する評議員会の規程があったが、これも設置されることはなく、規定は削除された。
3. 学会誌への投稿論文の査読、及び情報作品の評価の結果は学会誌に紹介するとあったが、削除された。

5 規程類の整備

規約以外の規程類

◆第1～2期(2000～2006)に設定された規程

- 理事会運営内規：理事会で審議及び報告すべき事項、それらの提案・報告を行う手続き等について定める
 - 情報メディア学会運営細則：賃金、旅費及び交通費、会議費、謝金の支出基準を定める
 - 賛助会員に関する規程
 - 情報メディア学会論文賞規程
- これらは、その後の改訂を経て現在も存続

◆その後設定された規程（発表者の知る限り）

- 学会誌の投稿規定、執筆要項、スコープ、出版倫理
- 奨学旅費助成に関する規定
- 文書等保存細則

6 初代事務局長としての思い出若干

6 事務局長としての思い出

学会に関わるようになったきっかけ

- ◆最初の設立検討時には参加していない
- ◆「先生に事務局長をお願いしたい」
 - 2000年3月頃、山本順一先生が突然私の部屋に見えてこう言われる。
 - それまで学会設立の話はほとんど聞いていなかったし、大学に来てから2年しか経っていない。
 - 「何で私が」と驚いたが、山本先生の言葉に乗せられ引き受けてしまう。
 - これがこの学会との長い縁の始まり

6 事務局長としての思い出

事務局長時代の裏話

◆山本順一先生とのコンビ

- 実務的に最も協力し合ったのは山本先生（理事で広報担当）
- 積極果敢派と優柔不断派の、ある意味でよいコンビ
- 創立から2, 3年経った頃、「よく潰れずに保ちましたね」と言い合ったことを今思い出して感無量
- 二人で、渡部満彦先生に二代目会長をお願いし、九段下や市ヶ谷のいくつか飲み屋で説得してお引き受けいただく

◆望月道浩さんと石川賀一さんへの謝意

当時博士課程大学院生で、名簿の管理等でお世話になる今頃になってであるが、ここに謝意を表したい

6 事務局長としての思い出

幽明境を異にすることになった先生方

- ◆ 設立発起人と初代理事になっていただいた**猪瀬博先生**
 - 当時NII所長、情報学界の指導的立場におられた。
 - 小野寺がお願いして設立発起人と理事をお引き受けいただいた。
 - 設立から4ヶ月後（2000年10月11日）に急逝された。
- ◆ 学会の生みの親とも言うべき**吉田政幸先生** (2003. 9. 24)
- ◆ 初代会長の**坂元昂先生** (2012. 3. 22)
- ◆ 二代目会長の**渡部満彦先生** (2018. 5. 23)

ニューズレターでの哀悼の辞(抜粋)(1)

猪瀬博先生 (ニューズレター第1号)

本会の発足に当たっては、ご多忙の身でありながら大変関心をお寄せいただき、設立発起人に加わって下さり、更に理事も引き受けて下さいました。まだ立ち上がったばかりの学会に強い後ろ盾になっていただくはずでしたが、誠に残念です。ここに深く哀悼の意を捧げます。

ニューズレターでの哀悼の辞(抜粋)(2)

吉田政幸先生 (ニューズレター第7号、山本順一氏)

吉田先生は、この学会には人一倍の愛着をおもちでした。というのは、本学会設立の生みの親であるからです。・・・学内では悲願(?)だったドクターコースの開設が決まり、吉田先生を中心として、将来の図書館情報学の教育研究をになう俊英を輩出する任務を果たすために、いろいろな秘策が練られたようです。

「やれっ」といったのは吉田先生、「仕方がない」と思ったのはわたし・・・しかし間違っただけで本当にできそうな雲行きになったところで、いろいろな人たちから余計な暖かい手を差し伸べられて、2000(平成12)年6月には見事に大きな声で産声をあげたのがこの学会です。

図書館情報大学の組織エゴを出発点にしながらも、ちっぽけな大学の枠を超え、いまでは情報メディア学会は多士済々の人材を擁し、飛躍のステージに立とうとしています。・・・天にまします吉田先生、もう大丈夫です。情報メディア学会はこれから順調に発展し、やがてここからノーベル賞級の研究者が出ること請け合いです(ホントかな。。。)

ニューズレターでの哀悼の辞(抜粋)(3)

坂元昂先生 (ニューズレター第25号、三輪眞木子氏)

坂元先生は、日本の教育メディアの発展を支えてこられた先駆者であり、ICTの発展により、マルチメディア・コンテンツが広く普及し始めた2000年に設立された本学会の名称である「情報メディア」という概念の生みの親でもあります。

『情報メディア研究』第2巻に掲載された巻頭言で述べられていることをあらためて読み直してみると、10年を経た今もなお通用する高察であり、研究者としての坂元先生の情報メディア研究に対する造詣の深さと熱意が蘇ります。

坂元先生は、常に穏やかな雰囲気をもとわれ、幅広い研究に関心を持たれ、誰にも包容力のある態度で接してこられました。また、学会の活動や研究についての相談には真摯な態度で的確なアドバイスを提供して下さりました。心より感謝の意を表します。

ニューズレターでの哀悼の辞(抜粋)(4)

渡部満彦先生 (ニューズレター第38号、長塚隆氏)

2006年に会長に就任されたとき、情報メディア学会の目的を再確認し、「さまざまな情報メディアについて、個別学問領域からの専門的研究をすすめるとともに、これまでの図書館情報学や情報学等の枠組みをこえて、学際的な研究活動を行う場を新たに設けること」と述べておられました。

また、情報メディア学会ニューズレター7号での寄稿では、第3回研究大会の企画テーマを検討する場で、「マーシャル・マクルーハンまで先祖返りをして、情報とは何か、メディアとは何かを今一度検討してはどうかという大会企画委員の一人である若手研究者の提案」をおもしろいと考えましたと述べておられます。このように、企画委員会委員長として、多くの若手の企画委員の意見によく耳を傾け、ある場合には積極的に採用して、新たな試みに挑戦することも辞されませんでした。

おわりにー創設期の考え方として伝えたいこと

◆設立趣意書に述べられた学会の理念

- アナログ情報メディアからデジタル情報メディア、文字情報メディアからマルチ情報メディアまで、共存する多種多様な情報メディアを包含
- 情報メディアにかかわる社会的基盤の研究、情報メディアの経営手法にかかわる人間の感性や認知メカニズムそして媒体材料についての研究など、既存の学会ではとりあげられなかった総合的で有機的な情報メディア研究を確立
- 研究論文だけでなく、社会に貢献すると思われる価値ある情報作品（コンテンツ、データベース、プログラム等）を正当に評価し、世に知らしめる

◆当初の規約における学会誌投稿論文の扱い

- 原著論文、総説、研究ノート等については、当該分野につき業績をもつ研究者による査読を行い、学会誌上で紹介する。
- 情報作品（コンテンツ、データベース、プログラム等）については、関係分野の学識経験者による評価を行い、学会誌上で紹介する。

◆初代事務局長としてやり残したことー学会の紹介リーフレットの作成

外部の人にお問い合わせをしたり入会を勧めたりするとき役立つと思う。現在もないとすればお願いしたい。

ご静聴有り難うございました

小野寺 夏生

nt.onodera@y5.dion.ne.jp